

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

—阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—

平成8(1996)年度

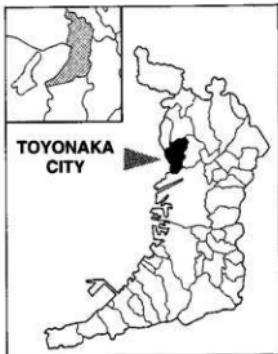
平成9(1997)年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

—阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—

平成 8(1996)年度



平成 9(1997)年 3月

豊中市教育委員会

序 文

平成7年1月17日午前5時46分、淡路島北部付近をはじめとする複数の震源から発したマグニチュード7.2の激震は、阪神地域と淡路島に計り知れない恐怖と災禍をもたらしました。

猪名川を介して兵庫県に接する豊中市におきましても、貴い命が失われ、また多数の家屋が損壊をうけるなど、その被害はわたしたちのくらしに重大な影響をもたらしました。

2年の月日がたった今日、阪神淡路人震災からの復旧・復興が着実にすすむなか、ふるさとの歴史・文化・自然を生かした新たなまちづくりが模索されております。そして、より潤いのある生活・文化をこれから社会に伝えていくことが、より重要な課題となっております。

この報告は、阪神淡路大震災に伴う復旧・復興事業の緊急性と文化遺産の一つである埋蔵文化財の重要性をふまえ、豊中市が平成8年度事業として国ならびに大阪府の補助を受けて実施した穗積遺跡の緊急発掘調査の概要を報告するものです。穗積遺跡は、これまでにおこなった発掘調査からも豊中の歴史を語る上で欠かせない重要な遺跡であることが知られております。そして今回の報告におきましても、新たな知見が加えられることになりました。

調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導、ご助言を、また土地所有者ならびに近隣の方々には文化財の重要性に対して深いご理解と多大なご協力を賜りました。文化庁、大阪府ならびに関係各機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のひとかたならぬお力添えにより、豊中市の文化財保護行政を推進できましたことを、ここに厚くお礼申し上げるとともに、今後もさらなるご支援をお願い申し上げます。

最後に、先の震災で亡くなられた方々のご冥福と、被災された方々の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

豊中市教育委員会

教育長 栗原 有史

例　　言

- 本書は、豊中市教育委員会が平成8年度阪神淡路大震災復旧・復興事業に関する国庫補助事業（総額20,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の報告を行う。
- 本年度事業は、穂積遺跡について、平成8年9月2日から平成9年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
- 発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は、下記に記すところである。
- 本書のうち、第Ⅰ章は橋田正徳が、第Ⅱ章は新本真之が執筆し、編集を橋田・新本が行った。
- 各折図に掲載した方位表記は、すべて國土座標系に基づく座標北を示す。
- 挿図・本文中の土色表記の基準は、「新版標準土色帖 1994年版」に基づく。
- 各調査区の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、深謝いたします。

遺跡名	調査地	調査面積	担当者	調査期間
穂積遺跡 19次	服部西町2丁目 56-8、57-1、641-7	218m ²	新本真之	平成8(1996)年10月3日～ 平成9(1997)年1月20日

目　　次

第Ⅰ章 位置と環境

1. 位置 1

2. 歴史的環境 1

第Ⅱ章 穂積遺跡第19次調査の概要

1. 調査の経緯 5

2. 遺跡の概要 5

3. 調査の成果 6

(1) 基本層序

(2) 検出した遺構

(3) 出土遺物

4. まとめ 14

挿 図 目 次

第Ⅰ章 位置と環境	第1図 遺跡分布図	… 3
第Ⅱ章 穏積遺跡第19次調査の概要	第2図 調査範囲図	… 5
	第3図 調査地位置図	(折り込み)
	第4図 調査区全体図	(折り込み)
	第5図 井戸1平面図・断面図	… 7
	第6図 片戸1北壁における海成層検出状況断面図	… 8
	第7図 井戸2平面図・断面図	… 9
	第8図 流路断面図	… 10
	第9図 流路内枕位置図・断面図	… 10
	第10図 出土遺物	… 13

図 版 目 次

図版1 遺構検出状況（南から）

図版2 (1) 流路土層断面（北西から）
(2) 流路土層断面（北から）

図版3 (1) 井戸1・2完掘状況（南から）
(2) 井戸1土層断面（西から）

図版4 (1) SP-3土層断面
(2) 主坑1土層断面

図版5 井戸1北壁土層断面

図版6 (1) 井戸2（南から）
(2) 井戸2（南から）

図版7 (1) SP-1礫板出土状況
(2) SP-2礫板出土状況

図版8 (1) 流路内鹿角出土状況
(2) 流路内骨出土状況

図版9 (1) 流路内遺物出土状況 1

(2) 流路内遺物出土状況 2

図版10 (1) 杭 1 検出状況 (西から)

(2) 杭 2 検出状況 (北から)

図版11 (1) 杭 3 検出状況 (東から)

(2) 杭検出状況 1

(3) 杭検出状況 2

図版12 (1) 土杭 1 出土遺物

(2) 井戸 1 出土遺物

(3) 井戸 2 出土遺物

図版13 井戸 2 出土遺物

図版14 (1) 井戸 2 出土遺物

(2) 流路内出土遺物

図版15 流路内出土遺物

図版16 流路内・溝 1 出土遺物

図版17 流路内出土遺物

第Ⅰ章 位置と環境

1. 位置

豊中市は、大阪府北西部に位置し、西は猪名川を介して兵庫県に接する。旧国区分では摂津国豊島郡に属する。豊中市の地形を概観すると、北部から東部にかけては待兼山・鳥熊山などの丘陵と、これらから派生する段丘が広がる。千里川を北の境とする中部は、通称豊中台地とよばれる中・低位段丘が、また台地の段丘崖を地形界に南部から西部にかけては猪名川などの沖積作用により形成された沖積平野が広がる。

なお、今回報告を行う穂積遺跡は市南部に広がる沖積平野に立地する。この沖積平野は、縄文海進以後の海岸線の後退と、猪名川の氾濫による沖積作用により形成される。穂積遺跡周辺が完全に陸化するのは、弥生時代後期頃となる可能性が指摘されている。

2. 歴史的環境

豊中市域において、人々の活動が確認されているのは旧石器時代に遡るが、その生活の場となる遺跡は知られていない。現状では、螢池北遺跡・螢池西遺跡にて、この時期の遺物が比較的まとまりをもって出土しており、将来待兼山丘陵周辺に該期の遺跡が発見される可能性を指摘するにとどまる。つづく、縄文時代においてもまとまりのある集落はまだ確認されてない状況にあるが、千里川流域の河岸段丘上に立地する野畠遺跡・野畠春日町遺跡・内田遺跡において中期から後期の遺構・遺物が確認されており、千里川流域に一定の活動領域があったことが想定できる。また、市内各地でも早期から晩期の遺物が散発的に出土しており、豊中台地などにおいても該期の人々の活動領域が存在した可能性が予想できる。

弥生時代には、待兼山丘陵・豊中台地、また沖積平野において集落の形成が認められるようになる。前期の段階では沖積平野上の勝部遺跡や小曾根遺跡にて集落の展開が想定されているが、山ノ上遺跡のように台地から派生する舌状丘陵に立地する遺跡においても生活の痕跡が確認されていることは注目される。中期には、螢池北遺跡や新免遺跡で集落が形成され、また小曾根遺跡においても前期に統いて集落が展開する。この時期を通じて、拠点的な集落として繁栄する小曾根遺跡や方形周溝墓群を中心に大規模な墓地を擁する螢池北遺跡が後期には衰退または消滅するのに対して、新免遺跡は後期以降も拠点的な集落として展開している。中期後半から後期には、平野部・丘陵を問わず大小の集落が出現し、後期には集落の数は増大する傾向がある。なお、この時期にあらたに展開する穂積遺跡、服部遺跡などの大規模な集落では東西各地の搬入土器が比較的まとまって出土しており、該期の流通を考える上で注意されよう。終末期になると、墓制に大きな変化が見出だされる。後期に一般化する円形周溝墓に加えて、終末期になると突出部を有

する円形（前方後円形）周溝墓が服部遺跡に出現し、突出した権力が形成し始める社会的状況が窺われる。

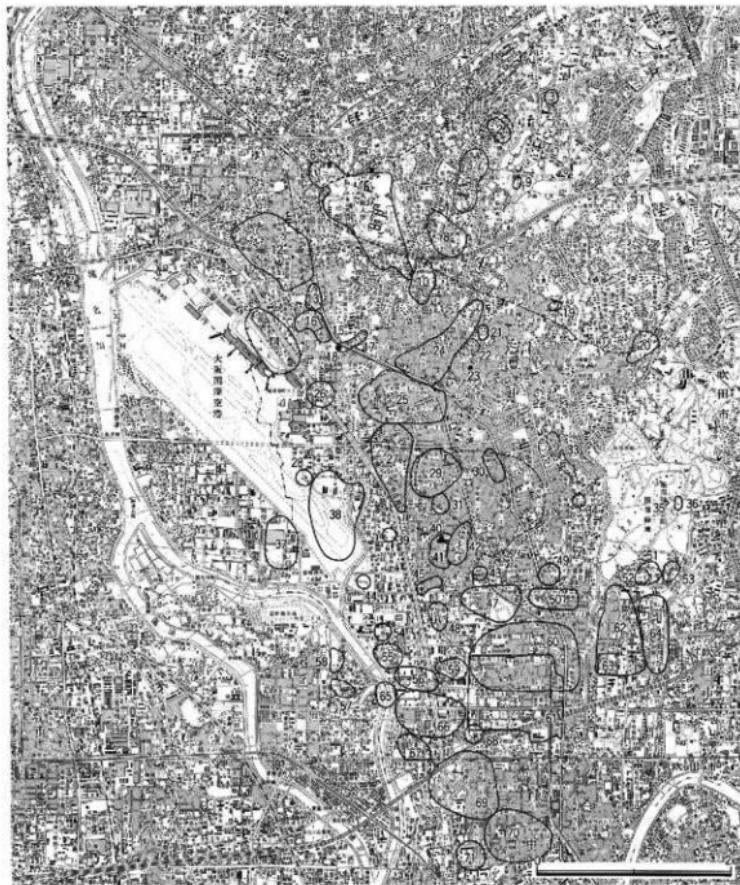
古墳時代の集落の多くは、弥生時代の集落の立地を踏襲するものが多い。しかし、前代から継続して展開する集落の例は今のところ少なく、利倉西遺跡、利倉南遺跡、島田遺跡などを挙げるだけに止まる。その他の集落については、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて途絶し、中期または後期に再び集落が展開するようである。なお、前・中期の主要な集落は平野部にみられるが、後期には桜井谷窯跡群における須恵器生産の隆盛に伴い、千里川流域の柴原遺跡、内田遺跡、新免遺跡、本町遺跡また天竺川流域の熊野田遺跡において集落が展開する。これらの遺跡では須恵器不良品が多量に出土する遺構を確認しており、須恵器生産に関与した集団が存在した可能性が想定されている。なお、螢池東遺跡では難波宮下層遺構または和歌山県鳴滝遺跡に匹敵する規模を有する前期末から中期の大規模な倉庫群が確認されており、この時期から豊中の地にも政治的施設がみられるようになる。

一方、市内の古墳は前期古墳の待兼山古墳、御神山古墳が丘陵上に築造されるが、継続する古墳は認められない。前期末からは台地上に桜塚古墳群の築造がはじまり、後期には、太鼓塚古墳群、新免宮山古墳群が形成される。この他、台地及び平野部において古墳周濠の検出が相次いでおり、古墳分布の再検討が成されつつある。

これら古墳の築造が終末を迎える飛鳥時代には、金寺山廃寺が造営され、その関連が考えられる建物が本町遺跡に出現する。奈良時代には、旧山陽道に接する螢池北遺跡、伊丹街道沿いの山ノ上遺跡、また桜塚街道上の曾根遺跡や猪名川下流域の上津島南遺跡、島田遺跡などにおいてまとまりのある集落が展開し、その他の遺跡でも建物群が散発的に展開するようになる。このうち、螢池北遺跡では柵列により周囲を隔てた建物が、また上津島遺跡や島田遺跡では、当該期の一般的な建物にはみられない大規模な建物が検出されており、官衙関連機関もしくは有力氏族の居宅と想定されている。なお、これらの遺跡はその性格を変化させつつも平安時代以降に継続しており、該期の集落の形成や開発との関連が注目される。

平安時代前期から中期の集落の状況は明確ではないものの、奈良時代に展開する先の遺跡の他に、少路遺跡、新免遺跡、豊島北遺跡、服部遺跡、螢池東遺跡において遺構が散発的に検出されている。曾根遺跡では官衙もしくは郡規模の開発領主の居宅と推定される大型建物群が周囲に関連施設とともにあって展開する。この建物群が廃絶したあとには、政治的色彩をおびた建物群の展開は見られなくなるとともに、にわかに中世村落への移行の動きが平野部の集落からはじまる。

平安時代後期には、小曾根遺跡・穂積遺跡・島田遺跡・上津島南遺跡など平野部の遺跡でまとまりのある集落が出現する。このなかで小曾根遺跡や穂積遺跡は、摂關家領垂水西牧（後の春日社領）として莊園化しており、公事・年貢を担い得る名主層の確立がうかがわれる。一方、その様相が明らかになりつつある小曾根遺跡では、一定の区画の中で建物群が展開しており、経営の安定化に成功した百姓層の姿を見出せることは注目されよう。以後、集落は鎌倉時代を通じてそ



- | | | | | | | |
|-------------|------------|-------------|-----------|------------|------------|---------------|
| 1. 太鼓塚古墳群 | 11. 桜井谷窓跡群 | 21. 金寺山魔寺 | 31. 四町南遺跡 | 41. 原田遺跡 | 51. 若竹町遺跡 | 61. 稲積村開墾 |
| 2. 齊東山町古墳群 | 12. 宝池北遺跡 | 22. 新免宮山古墳群 | 32. 桜塚古墳群 | 42. 曾根遺跡 | 52. 石連寺廃寺 | 62. 小曾根遺跡 |
| 3. 野瀬遺跡 | 13. 宝池東遺跡 | 23. 金山垂跡陪石 | 33. 下原麻盛寺 | 43. 曾根東遺跡 | 53. 寺内遺跡 | 63. 萩原田古代聚落遺跡 |
| 4. 野畠寺日向聚落 | 14. 宝池西遺跡 | 24. 本町遺跡 | 34. 長瀬寺遺跡 | 44. 原田中町遺跡 | 54. 梅實北遺跡 | 64. 北条遺跡 |
| 5. 少路遺跡 | 15. 宝池遺跡 | 25. 新免遺跡 | 35. 海塚古墳 | 45. 原田元町遺跡 | 55. 利曾遺跡 | 65. 上津島川床遺跡 |
| 6. 特寄山古墳 | 16. 麻田蘿附塚跡 | 26. 荒輪遺跡 | 36. 境端鉄砲丸 | 46. 増輪穴跡 | 56. 利曾南遺跡 | 66. 上津島遺跡 |
| 7. 特寄山遺跡 | 17. 南刀根山遺跡 | 27. 山ノ上遺跡 | 37. 原田西遺跡 | 47. 鮎島北遺跡 | 57. 利曾西遺跡 | 67. 上津島南遺跡 |
| 8. 内田遺跡 | 18. 御持山古墳 | 28. 兼井遺跡 | 38. 藤部東遺跡 | 48. 曽長南遺跡 | 58. 楯堂の索遺跡 | 68. 楯堂ポンプ場遺跡 |
| 9. 松井谷石笠磐石群 | 19. 上野遺跡 | 29. 四町北遺跡 | 39. 藤部東遺跡 | 49. 城山遺跡 | 59. 藤部西遺跡 | 69. 島田遺跡 |
| 10. 荘原遺跡 | 20. 熊野田遺跡 | 30. 四町遺跡 | 40. 原田城跡 | 50. 服部遺跡 | 60. 物樋遺跡 | 70. 庄内地跡 |
| | | | | | | 71. 島江遺跡 |

第1図 遺跡分布図 (1:50,000)

の範囲を拡大し、後期には服部遺跡や熊野田遺跡などで新たな集落が成立する。また、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、山ノ上遺跡および小曾根遺跡・北条遺跡の北方の段丘上にある石蓮寺廃寺において寺院が建立される。その運営主体については不明であるが、仏教信仰が在地に浸透する土壤が成立していたことは、この時代の社会を考える上で注意されよう。

鎌倉時代末期から室町時代にかけて、集落の形態に大きな変化が現れる。中世前期の集落は耕地の中に建物群が点在し、屋敷と耕地が分離していない状態にあったが、この時期から屋敷と耕地は分離し集落は複数の建物群の集合体、いわゆる集村的景観を呈するようになる。その頃、春日社領垂水西牧では在地と春日社神人との対立が激化し、南北朝期を通じて在地支配は混亂する。六車郷に「原田兄弟」が登場し、南郷日代今西氏が小曾根村へ下向し方二町の屋敷を構えるのも、この時期にあたる。

戦国時代以後の集落は、調査成果が乏しく状況は不明であるが、原田神社境内周辺に位置する岡町では商業地的様相をおびて展開することが文献から窺われる。また、この時期は市域の要所に城郭が出現する。刀根山城、原田城、椋橋城である。これらの城は織田信長の有岡攻めの最前線となるが、原田城の調査において検出された幅18m、深さ6mもの堀は、その状況を知る上で貴重である。以後、これらの城郭は放棄されたのか、文献から姿を消す。

太閤検地以後幕藩体制の確立の中で、市域における村落は近世村落へ再編され、平安時代末期から続いた春日社領垂水西牧も解体する。市域の大部分は天領・譜代大名領団などに細分されるが、唯一の外様大名として麻田藩が組み込まれる。その規模は一万石で、祝正治氏から譲り受けた屋敷を陣屋として幕末に至る。陣屋の全容については、今後の調査に期待されるところが多い。

第Ⅱ章 穂積遺跡第19次調査の概要

1. 調査の経緯

当該調査地は服部西町2丁目57-1、56-8、641-7に所在している。1996年8月14日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて試掘調査をおこなった。その結果、現地表より2.5m下の沖積層上面において遺構の頗るな存在を確認した。その後の協議において、基礎構造の変更予定はなく、工事において損傷・損壊を受ける218m²を対象として発掘調査を行うこととなった。調査期間は1996年10月3日～翌年1月20日である。

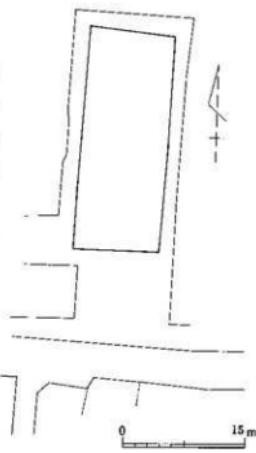
2. 遺跡の概要

調査地点の周辺は、阪急電車宝塚線の開通とともにあって拓かれた住宅地・商業地である。地理的には猪名川下流域の沖積地上にあたる。現地表の標高は約4m前後である。調査地周辺の試掘調査や発掘調査などから考えると、周辺一帯はかつて猪名川下流域氾濫原として洪水などの災害を度々受けているようである。

穂積遺跡は阪急宝塚線服部駅の西側を中心に東西1km、南北約700mにわたってひろがる集落遺跡である。弥生時代後期における畿内第V様式の指標の一つであった「穂積式土器」とは、この遺跡から出土した資料にもとづいて付されたものである。これまでに18箇所の発掘調査をおこなっているが、これは市内にある遺跡のなかでも比較的回数の多いものといえるだろう。主な調査契機は、個人住宅および共同住宅の建てかえに伴うものである。これまでの調査では、弥生時代後期～末期および中世の遺構・遺物を中心検出しており、その時期は縄紋時代～江戸時代にまたがる複合遺跡とされている。

1992年度におこなわれた第14次調査では、縄紋時代の潮干帯の一部およびこれに伴う海成層を検出した。この調査で得られたデータは、大坂湾岸の海進・海退の研究に寄与するものとなっている。今回の調査でも、調査区の一画でこうした潮干帯の一部とみられる層ならびに貝化石を検出している。

穂積遺跡の中でも特徴的である弥生時代の資料については、1996年度におこなわれた第18次調査をあげることができるだろう。この調査では、銅鏡未製品3連分が遺棄された状態で検出されている。鋳型や砥石などの銅鏡製作に関する資料は、見つかっていない。しかし、この調査から



第2図 調査範囲図 (1:600)

考えられることは、付近に銅製品製作のための施設が存在するか、調査区周辺がこうした製品を集積する場所ということである。当該調査地点は、第18次調査区からほぼ西に30mの地点に位置している。

3. 調査の成果

(1) 基本層序

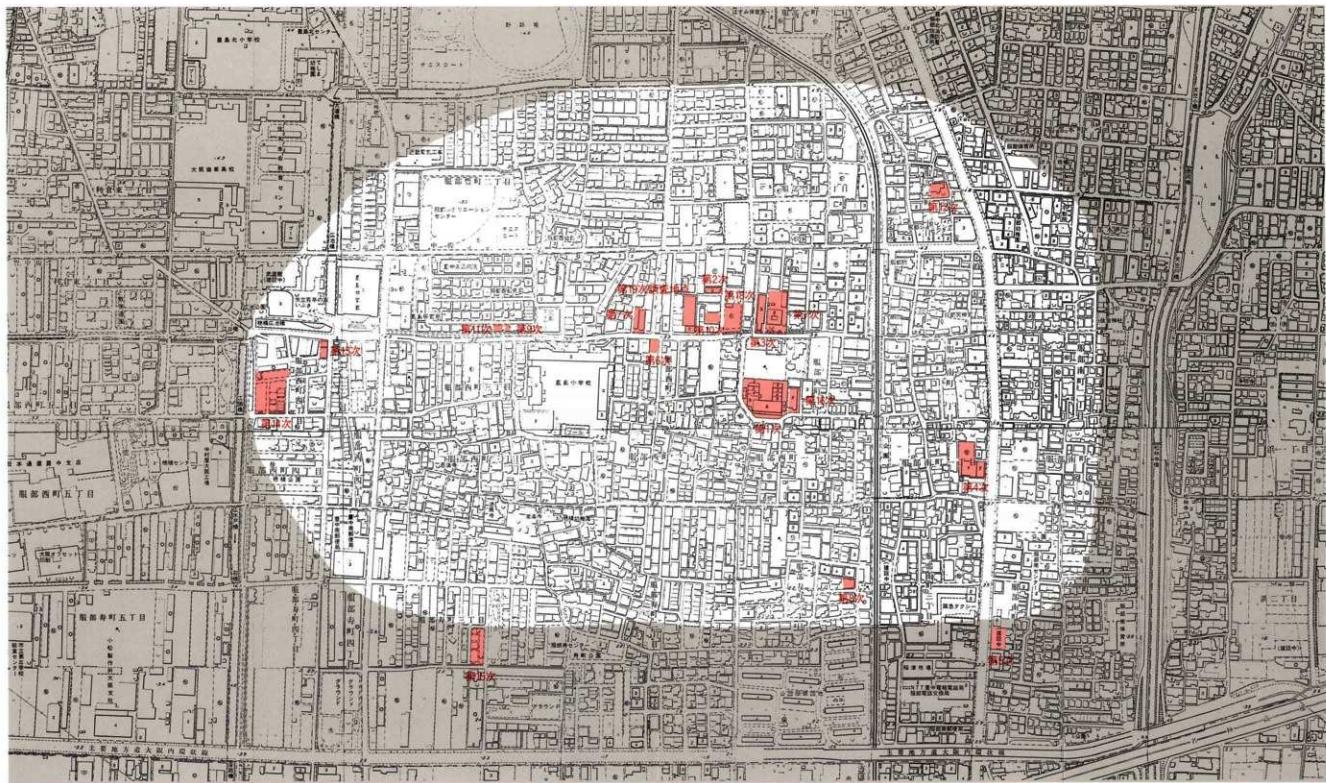
当該調査区における現状地表の標高は、T.P.+4m前後をはかり、ここからマイナス約1mで旧耕土に達する。旧耕土から包含層までは約8層あり、いずれも水平に堆積する。これらは中世以降の耕土あるいは洪水層と考えられ、灰オリーブ色～灰色シルト質粘土を中心構成される。包含層は褐色粘土をベースとしてオリーブ褐色粘土細粒砂をやや含む。遺構面は黄褐色～青灰色シルトを中心に中粒砂、粗粒砂を多く含み、遺構面のベースとなる堆積土は暗オリーブ褐色粗粒砂を中心にシルトを若干含んでいる。

(2) 検出した遺構

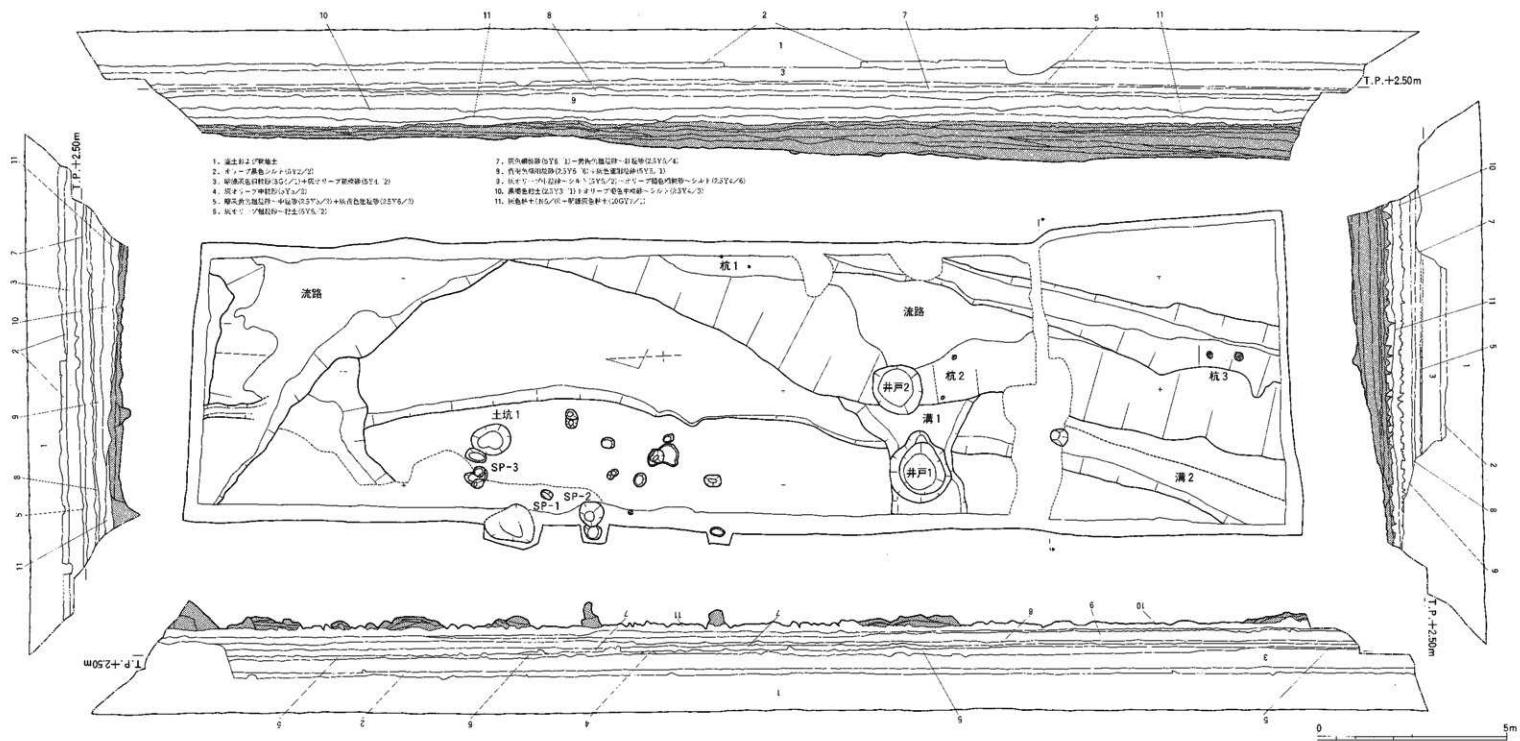
今回の調査では218m²という調査面積の中で、流路を中心として比較的密集度の高い遺構を検出している。当該調査区の中で検出した遺構の内訳は、ピット20あまり、土坑1基、井戸2基、溝2、流路1、杭3対などである。これらの遺構の大半は、弥生時代後期から終末期に属すると考えられる。調査区の全体にわたって存在する流路からは、ミニチュア土器や用途不明の土器、鹿角の加工製品などといったこれまでの調査であまり検出されていない資料が得られた。また、このほかにも多数の土器や木製品類、動物遺体などの廃棄がみられ、当該期の生活環境の復元といった意味からも注目される。以下、これらの主要な遺構について述べる。

ピット 今回の調査で検出したピットの多くは、調査区の中央やや西よりに多く存在する。これは後に述べる流路とのかかわりの中で、地形的に高い位置に建物が存在したことを見ている。ピットの直径は20cm～65cm前後を測り、深度は10cm～40cmである。これらピットの中には、建物を構成するものもあると考えられる。しかし、当該調査において建物・柱列の存在を確認することはできなかった。今回検出した一群のピットは、全体にまばらな分布を示し、その中心が調査区西側にあるものと推定された。

ピットの中には礎板を伴うものもみられ、地盤の脆弱な当地にあって、生活するための工夫をおこなっていたことがわかる。SP-1・SP-2はそれぞれ礎板を伴った例である。SP-1は直徑約25cmであり、深さは約20cmを測る。層位は3層であり、このピットの底部でもやや楕円形の礎板を検出した。この礎板は、長軸約15cm、短軸4cm前後、厚さ数cmを計測し、断面形態はいびつな円を描く。このことから、礎板は板材ではなく材木を転用したものといえる。SP-2は直徑45cm、深度30cmを測り、層位は2層にわかれれる。このピットの底部で一辺15cm前後、厚さ数cmを測る長方形の礎板を検出した。柱痕や柱本体はみられなかったことから、この柱穴が機能したのちに柱を抜き取ったものと考えられる。また礎板は、SP-2の底部からわずかに浮いており、



第3図 調査地点位置図 (1:5000)



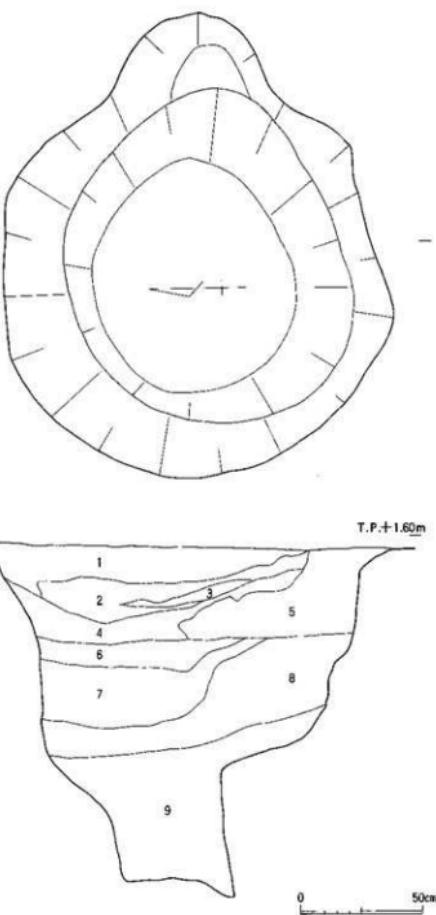
第4図 調査区全体図(1:100) ※トーン部分は弥生時代にあたると考えられる層である。

板自体が柱穴の中心から外れ、なおかつやや傾斜した状態で検出している。これらの点からもSP-2の柱が抜き取られたと考えることができよう。これらのピットはそれぞれ近い位置に存在するものの、その大きさ、深度とともに異なることからそれぞれ別々の建物に伴うものと考えられる。

土坑1 この土坑は、調査区北側やや西よりにあり、直径約1m、深度65cmあまりを測る。平面形態は南北方向にのびるややいびつな楕円形を呈する。層位は3層にわかれれる。上部の埋土を中心として纖維質のものが含まれていたが、それが植物遺存体であるか、流木あるいは木製品であったかは明確にできなかった。この土坑の下層から高杯の壊部が出土している。

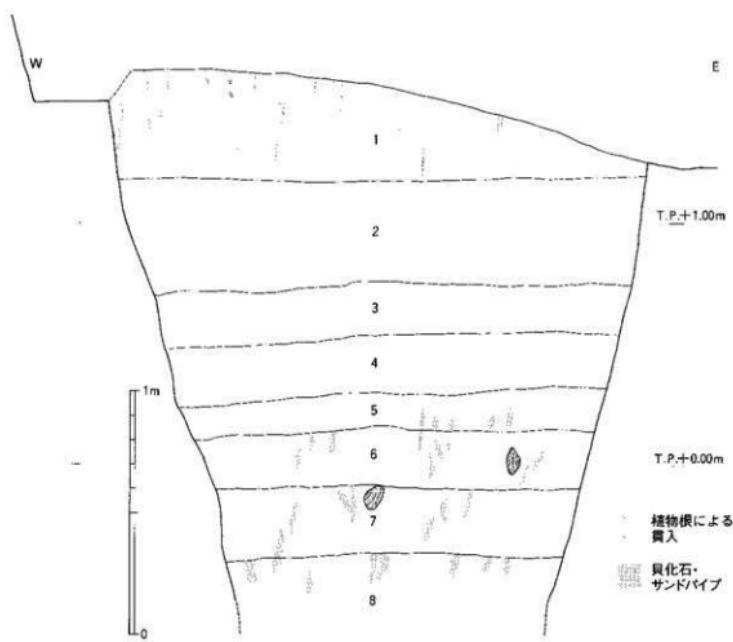
井戸1 調査区の西側、南よりに存在する遺構。直径約1.6m、深度1.4mを計測し、平面形態は一部が若干はみ出るいびつな凹を描く。底部の標高がT.P.+0.2mとかなり低く、地山面からかなり掘り込んでおり、現在でも湧水が激しか

ったことなどから考えると、この遺構は井戸であるといえよう。とすれば、その東側の突出した部分は、この遺構を利用した際に水を汲み出すための足場であったといえるだろう。遺構の層位は9層にわかれ、特にその下部では貝類の廃棄がみられた。井戸枠などは埋土中に流木および木



第5図 井戸1平面図・断面図 (1:20)

- 1. 淡灰色中粒沙～砂(7.5YR4/3)
- 2. 黄灰色粘土(7.5Y5/1)
- 3. 淡黄色粘土(7.5Y7/3)
- 4. 淡灰色粘土(7.5Y4/1)
- 5. 淡灰色細粒砂～シルト(7.5Y4/1)
- 6. 黑褐色粘土(7.5Y3/1)
- 7. 淡灰色～淡褐色(7.5Y4/1)
- 8. 黑褐色細粒砂～シルト(7.5Y3/1)
- 9. 黑灰色粘土(7.5Y4/1)



1. 黄灰色シルト (5G6/-1) + 開拓灰黄色粘土 + 中粒砂 (7S6V1/-1)
2. 明オリーブ灰色シルト (2S6T/-1) + 灰色厚粘土 (10Y5/-1) 上部に植物根を含む
3. 灰色毛起砂 (N4/-1) + 灰色シルト (10Y5/-1)
4. 灰色膠砂 (N4/-1) + 灰色シルト (10Y5/-1)
5. 暗灰色暗赤褐色シルト (K3/-0) + 灰色粘粒砂 (N6/-0)
6. 暗灰色暗赤褐色シルト (K3/-0) 貝化石を含む
7. 暗灰色細粒沙シルト (K4/-0) 貝化石を含む
8. 暗灰色底积砂シルト (N3/-0) 貝化石を多く含む

第6図 井戸1北壁における海成層検出状況断面図 (1:20)

製品がみられたにもかかわらず、検出できなかった。この遺構の最下層からは、製塙土器の脚部を検出しているほか、多数の遺物が出土した。

遺構を完掘した際、貝化石が地山に食い込むかたちで出土した。このため、遺構の一部を拡張し、第14次調査において検出したような海成層が存在するか精査した。その結果、地山面から約1.6m下のT.P.+0m以下において貝化石が含まれはじめたことが判明した。今回の調査では、深度が特に深かった井戸1に関してのみ海成層の確認を行っている。T.P.-0.7m前後の地点まで調査をおこなったが、湧水が激しくなおかつ上部の地山面が崩落しあげたため、それ以下の掘り下げおよび確認はしなかった。

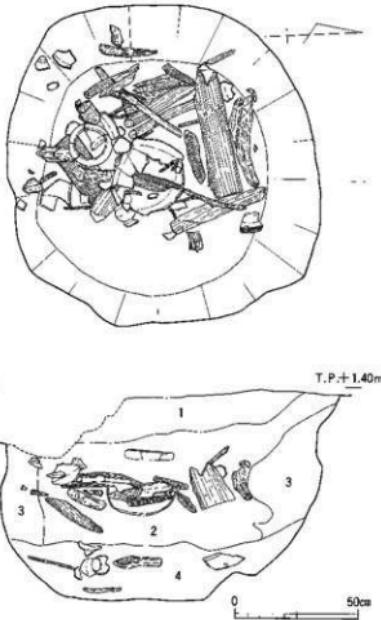
井戸2 調査区のやや南にある井戸2は、後述する流路のできる前に存在したと考えられる遺構である。位置的には井戸1の東側にあるもので、その内法は直径約1.3m、深度約80cmを測る。埋土は4層にわけられ、特にその下部から多くの木製品や土器が出土している。井戸枠は検出で

きなかったものの、地山面に接する層の平面形態がドーナツ状に近く、断面においても直下に落ち込む形を呈することなどから井戸である可能性が高い。井戸枠は出土した他の木製品、流木の残存度合いが高いことなどを考慮に入れると、井戸の機能が停止してから抜き取られたものと考えられる。

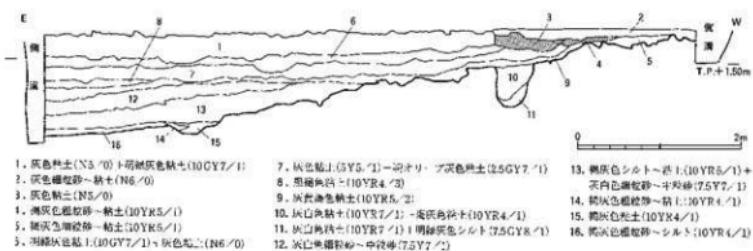
溝1 調査区南側西壁から流路に向かってのびる溝で、幅約2m、深さ数cmから20cm前後を測る。井戸1との重複関係では、こちらが古くなる。流路との重複関係は明確にできなかつたが、溝の底部が東に向かうにつれて低くなっていることから流路に排水するための施設であることも考えられる。

溝2 調査区南西角から北側にみられる溝である。幅約1.5m、深度20cmあまりを測る。当初、流路にともなう埋土と考えていたために東側のプランを追うことができなかつた。段階としては、流路よりも新しい時期に掘削されている。また、この溝が掘削される面は、流路の埋没後であり、その後の利用が断面観察によって出島であるとわかつることから、この遺構がそうした水利利用にともなう施設である可能性も考えられる。

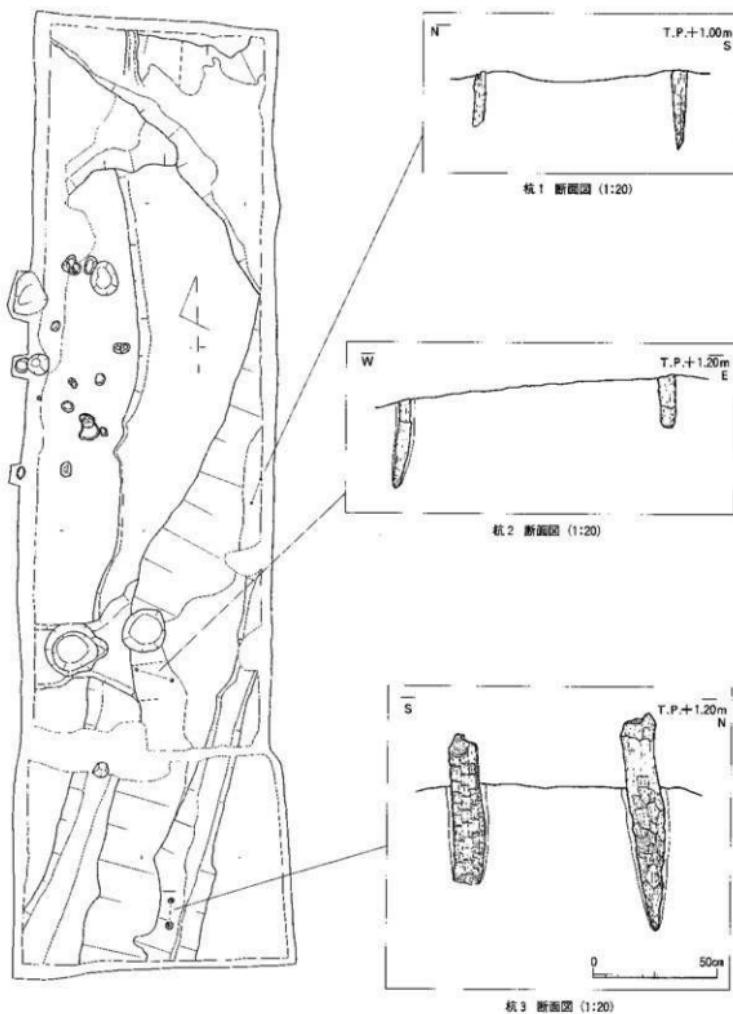
流路 この流路は、調査区北西角から東よりに弧を描きつつ南に向かっており、その埋土は、北



第7図 井戸2平面図・断面図 (1:20)



第8図 流路断面図 (1:60) ※トーン部分は溝



第9図 流路内杭位置図・断面図

備に向かうほど薄くなる傾向がみられる。深度は浅いところでは約25cm、深いところで約1.2mを計測する。検出状況からは、人為的に掘削されたものであるか、自然流路であるか判然としな

かった。

流路内の埋土は、上部層が粘土を中心として構成されるのに対して、下部層では粗粒砂を中心となる。また、粘土層と粗粒砂層が混じり合う部分や相互にラミナを形成するところもあり、ゆるやかな水流、激しい水の流れがあったことが推察される。部分的ではあるが、粗粒砂が固い塊となっている面も存在し、かなり長期間にわたって水が干いている状況もみられた。調査区の北部では、全体に粘土層は薄く、粗粒砂層が厚い傾向にある。逆に、調査区の南側では粘土層が厚く、粗粒砂層が薄い傾向が認められた。このことから流路は、調査区北半から南に向かって一気に砂が流れ込み、この後に徐々に粘土が堆積していった状況が考えられる。同時に流路の水流は、常に同一であったのではなく、水流の変化がかなり顕著であったと考えられる。また、流路内の水位が下がり、底が干あがることもあったといえよう。

この流路の埋土からは、多くの流木および木製品、鹿角や骨類といった動物遺存体、土器などが出土している。出土した土器の中にはミニチュア土器や用途不明の土器などがみられる。このことから近隣で祭祀またはそれに近い儀式が採り行われたものと推察される。また、流路の底部で出土した鹿角には、面取りが施され、一部に刻線が認められる。この遺物も上述した土器と同様に祭祀にかかわる可能性が高い。

杭列 流路の一部には、地表面に杭が打ち込まれていた。杭はそれぞれ2本を一組として対をなしており、調査区内には合計3対みられた。

杭1 調査区中央東壁付近にみられるもので、杭間の幅約80cmを測り、30cm前後の深さに打ち込まれる。杭の直径は、およそ5cmである。用途としては、足場を組むためのものと考えられるが、杭の細さを考慮すれば別の使われ方をしたのかもしれない。

杭2 調査区南より、戸井戸2の南側にある杭。軸の方向は、溝1の延長線に近く、あるいは溝1に関連するものであるかもしれない。杭相互の距離は約1mであり、35cm前後の深さに打ち込まれる。杭自体の直径は、約7cm前後で杭3のそれと比べるとやや太めである。この杭の用途も足場を組むためのものと考えられる。

杭3 調査区南端付近にある杭3は、これらの杭の中でも最も太く、その規模も大きい。杭相互の距離は約60cmであり、地山に対して55cmの深さに打込まれている。用途としては、廃棄などをおこなう際の足場や、あるいは調査区の東側にあるとみられる対岸へ渡るための施設といった可能性が考えられる。

(3) 出土遺物 (図版12~17参照)

1は土坑1から出土した高杯の杯部である。口縁部径約15.5cm、残存高5.5cmあまりを計測する。体部外面には一様にナナメハケを施している。

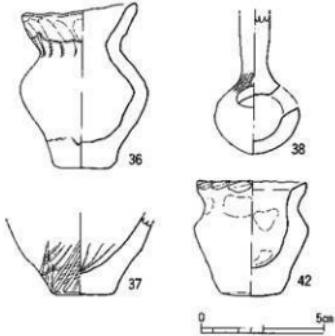
2~4は戸井戸1から出土した遺物である。2は高杯の柱状部と考えられる部分であり、最大径約6.5cmを測る。上部と下部にはそれぞれ4方スカシがみられる。外面にはミガキを施し、内面は粗くナデつけている。3は高杯の脚部であり、根部には4方スカシがみられる。残存高は約6.2cm

を計測する。4は製塙土器の脚部で、その径は約4.4cmを測る。脚部の内面には指痕が認められるほか、2次焼成による胎土の変色が認められる。胎土は粗粒砂の混入するかなり粗い胎土である。

5～15は井戸2から出土した遺物である。井戸2からはこのほかに多数の木製品が出土している。5は広口の壺で、復元口縁部径は約11cmを計測する。頭部外面および口縁部内面にはミガキ調整がみられる。口縁部にはハケによって粗い波状文が施される。6は細い頸部をもつ壺である。最大胴部径約15.2cmを測り、底部径は復元で約1.2cmである。外面上には一様にミガキ調整を施している。7はやや広口の口縁を有する小型の壺で、口縁部径約10cm、底部径約3.9cm、器高9.7cmあまりを計測する。口縁部の内外と体部から底部までの大半の部分にミガキ調整がみられ、体部内面には縦方向のハケが施されている。8は丸い底部を有する小型壺である。口縁部径約6.3cm、底部径約1.2cm、器高8.5cm前後を計測する。外面は大半が緻密なミガキ調整で覆われる。口縁部内面には外面に比べてやや粗いミガキ調整を施す。体部内面にはナナメ方向のハケが施され、底部内面にはクモノス状の圧痕がみられる。9は壺で、口縁部径約17cm、底部径約5cmを計測し、器高35.5cmを測る。外面にはラセンタキ技法が認められ、内面には全面にわたって粗いハケを施している。10は壺の口縁部から体部上半にかけての部分である。復元口縁部径は約14cmで、外面にタタキ技法が施される。内面の調整は摩滅しており不明瞭である。11は壺の体部上半から口縁部にかけての部分である。口縁部径は、復元で約15cmを計測する。内面には一様にナナメハケが施される。12は壺の体部上半から口縁部にかけての部分である。口縁部径は復元で約14.4cmを計測する。内面にはやや密なナデがみられる。13は小型の鉢で、口縁部径約11.2cm、底部径約3.8cmあまり、器高約6.6cmを計測する。外面には粗いナデが施され、内面にはナナメハケのほか、クモノス状の圧痕も認められる。14は脚を伴う小型の鉢であり、口縁部径約9cm、底部径約7.5cm、器高9.4cmを計測する。体部は全体にタタキ技法がみられ、このうち粗いナデが施される。内面にはほぼ全体に粗いナデが認められる。15は、砾石とみられる。長軸長約28.5cm、短軸長約14.5cm、厚さ10.5cmあまりを計測する。

16～41は流路から出土した遺物である。16は広口の口縁をもつ壺で、口縁部径約18.9cmを測る。口縁部の内外面にはミガキ調整がみられる。17は、広口の壺で、口縁部径は約15.2cm。胎土の色調は淡茶褐色を呈し、いわゆる牛駒山西麓産の土器と考えられる。18は広口の口縁を有する壺で、口縁部径は約18cmを計測する。やや肥厚した口縁部端面には円形浮文を貼りつけ、頸部には突帯を1条めぐらせており、19は広口の壺で、口縁部径約20cmを測る。肥厚気味の口縁端部に円形浮文を貼りつけ、頸部には突帯が1条みられる。20は広口の口縁部を有する壺であり、口縁部径約15.2cmを計測する。口縁部外面には縦方向のハケが施され、内面にはミガキ調整がみられる。21は広口壺で垂下した口縁部端面には櫛描波状文や爪形文などがみられる。口縁部内面はハケを施し、この後にミガキ調整を行っている。口縁部径は約23.6cmを計測する。22は小型の壺で、胴部最大径約9.2cm、底部径約3.5cm、残存高7.4cmあまりを計測する。23はツマミ部分が穿孔される

壺蓋である。復元口縁部径は、約15.5cmであり、器高約5cmを計測する。ツマミ部分の径は約3.3cmで、穴の径は最も狭い部分で約1.1cmを測る。24は小型の壺であり、内面にハケを施す。口縁部径8.3cmあまり、底部径約2.1cmを計測し、器高は8cm前後である。25は小型の鉢である。復元口縁部径約11.6cm、底部径約3.4cm、器高6.8cm前後を計測する。内面にはクモノス状の圧痕のほか、緻密なハケが施される。26は小型の鉢である。内面調整は摩滅のためかやや不明瞭であるが、クモノス状圧痕が認められる。口縁部径は復元で約10.6cm、底部径約3cm、器高6.4cmを計測する。27は小壺の鉢で、底部には8mm大の穿孔がみられる。外面にはタタキ技法がみられ、内面には緻密なハケを施す。底部径約4.8cm、残存高は約5.1cmを計測する。28は鉢の体部から脚部にかけての部分で、口縁部径は復元で約14cm、残存高約8.5cmを計測する。体部内外面には、ミガキ調整がみられる。29は高杯の脚部であり、端部の径は約9.8cmである。杯部内面の調整は剥離のため不明瞭である。30は高杯の脚部で、端部径は約9cmである。脚部の外面には一様にナデが施される。31は高杯の脚部であり、端部径は約11.2cmを計測する。直径約1.2cmあまりの3方スカシがみられる。外面には縦方向のミガキを施し、内面はやや粗いナデが認められる。32は高杯の脚部で、端部の径は約10.4cmを測る。直径1cm前後のスカシを3方に配している。内外両面ともにナデが施されているが、内面のそれは外面向くらべてやや粗いものといえる。33は高杯の杯部から脚部であり、基部の直徑は約3.5cmを計測する。杯部には内外面ともにミガキ調整が認められる。34は4方にスカシをもつ高杯の杯部から脚部で、基部の直徑約2.8cmを計測する。杯部および脚部ともに緻密なミガキ調整が施される。35は2段4方スカシを有する高杯脚部である。外面はハケを施した後にミガキ調整を行う。裾部内面にもハケが施される。36は広口壺を模倣したと考えられるミニチュア土器である。口縁部径約4.6cm、底部径約2.4cm、器高6.7cmあまりを計測する。手づくねによって頸部まで成形しており、内面の断面形態は一部歪んでいる。口縁部には接合痕がみられ、頸部にも接合時のヘラの圧痕が認められる。37は鉢を模倣したミニチュア土器である。口縁部は欠損しており、底部径約3cm、残存高3.4cmあまりを計測する。38は用途不明の土器である。外観は丸底フラスコに似ている。球体の部分には8mmあまりの穿孔がみられ、内部は空洞である。軸長は残存する部分で約5.8cm、球体部分は直徑3.3cmあまりを計測する。用途としては鉢の可能性を考えることができるが、内部に入れ子はみられなかった。器歯がやや厚いことを考慮すれば或いは筒のようなものであるかもしれない。39は土鍤であり、軸長約6.4cm、断面径3.6cm前後を計測する。紐を通すための穴の直徑は1.2~1.6cmで、重量約120.5gを測る。40は七鍤で、軸長約



第10図 出土遺物（1:2）

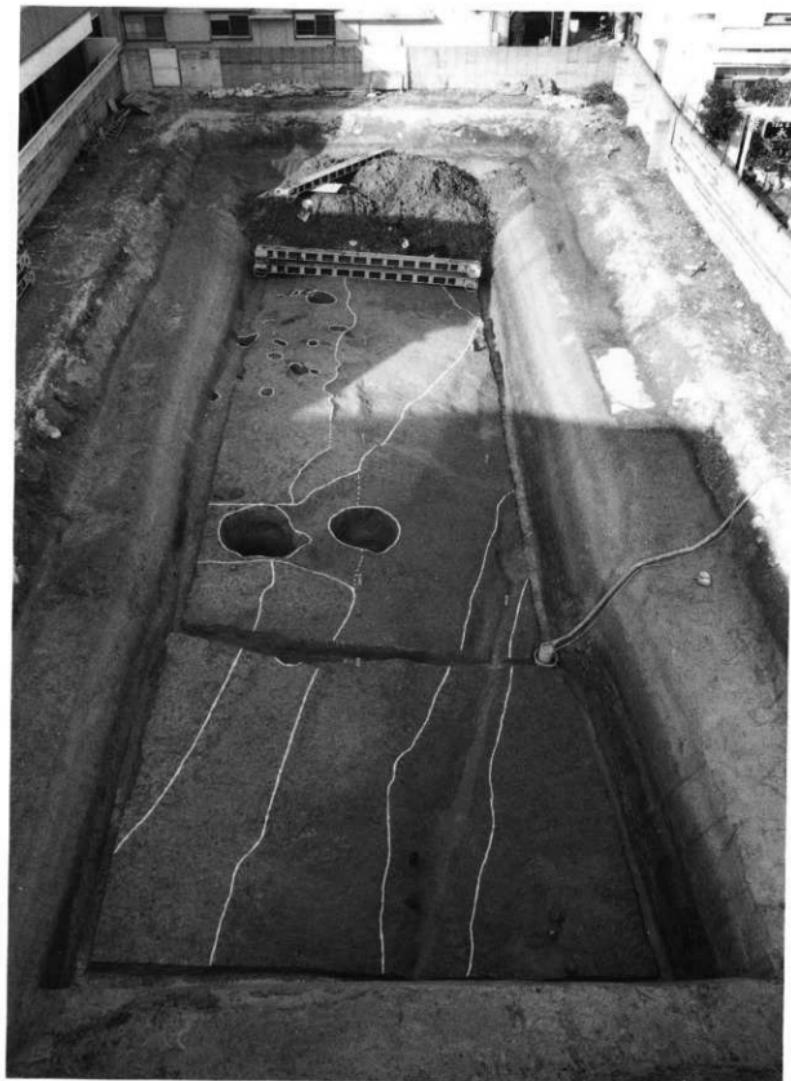
9.3cm、断面径3.7cm前後を測る。紐を通すための穴の直径は2.5~1cmで、重量約161.4gを測る。41は鹿角で、全長21cm、基部の直径2.6cmを測る。角の主要部分に縦方向の筋を入れ、基部は面取りしてのちに横方向の筋目を数本施している。角の主軸に沿って若干の加工がみられるもののその用途は不明である。42は、溝1から出土した甕に類似するミニチュア土器である。底部を成形したのち手づくね手法によって口縁部まで一氣につくりあげている。復元口縁部径約4.4cm、底部径2.4cm、器高約4.7cmを計る。

4. まとめ

今回の調査では、遺構の大半が弥生時代後期~終末という時期におさまり、調査区の中でも特に面積を占めていた流路から多くの遺物が検出された点において特徴がみられる。当該調査においては流路内の水流がかなり変化に富んでいる傾向が認められ、同時に流路内からは幾つかの祭祀にかかる遺物が出土した。既往の調査から撃積遺跡周辺は、洪水などの災害が度々起こりやすい環境にあったことがわかっている。この両者の要素を突き合せて考えれば、このような祭祀遺物は、当時起こった一連の変化が人々に影響を与えたものとして評価することができよう。

そのほかの遺構の特徴として、柱穴からは礎板が検出され、当地における地盤が脆弱でそれに対して人々が工夫をこらしている様子が窺われる。また、遺構内から出土した土錘は、猪名川流域に暮らす撃積遺跡の人々が漁をおこなったものであると考えられ、川とともに生きる姿を髣髴とさせるものといえよう。

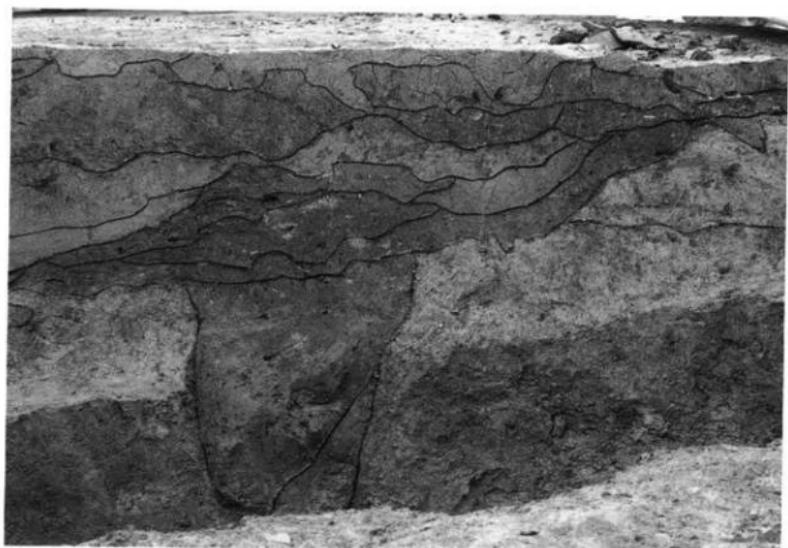
図 版



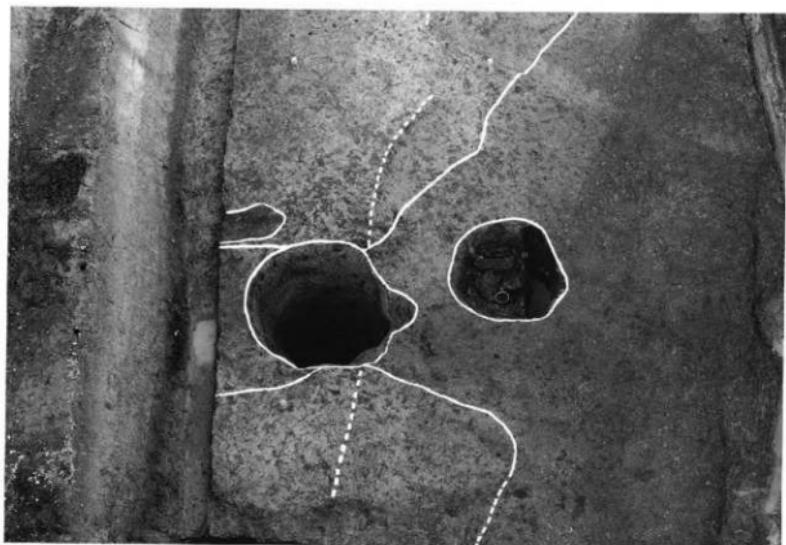
遺構検出状況（南から）



(1) 流路土層断面（北西から）



(2) 流路土層断面（北から）



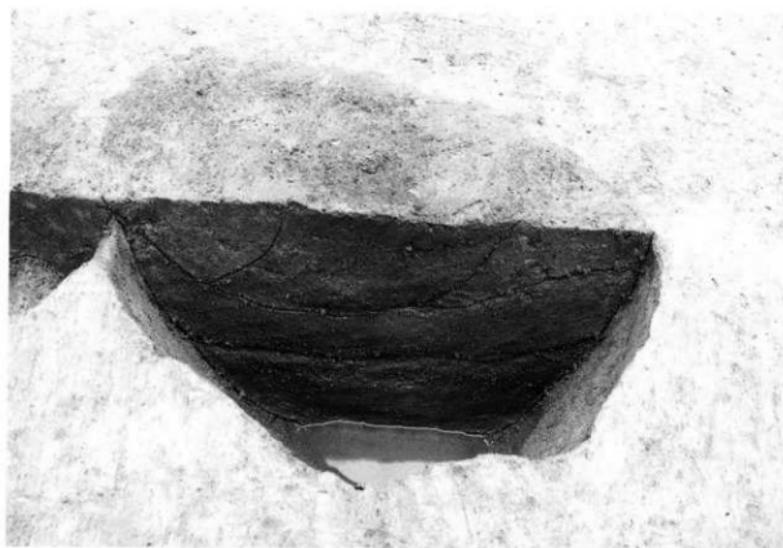
(1) 井戸1・2完掘状況（南から）



(2) 井戸1土層断面（西から）



(1) SP-3 土層断面



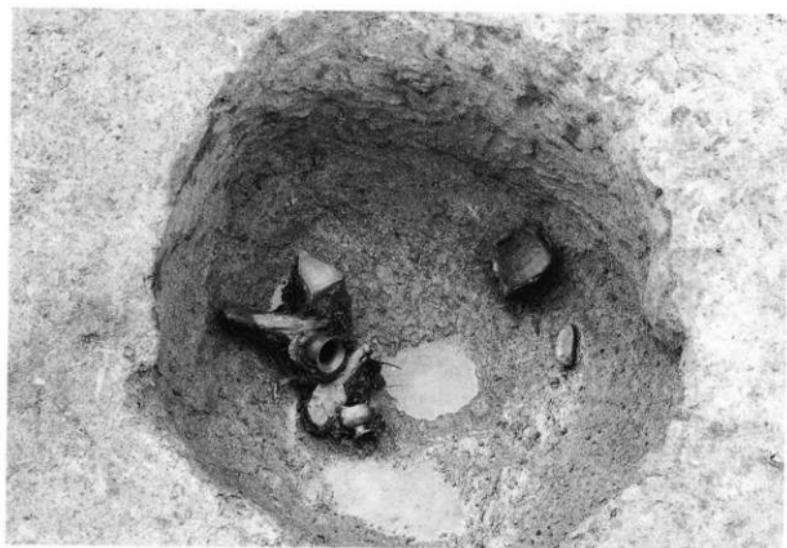
(2) 土坑1 土層断面



井戸1北壁土層断面



(1) 井戸2 (南から)



(2) 井戸2 (南から)



(1) SP-1 磁板出土状況



(2) SP-2 磁板出土状況



(1) 流路内鹿角出土状況



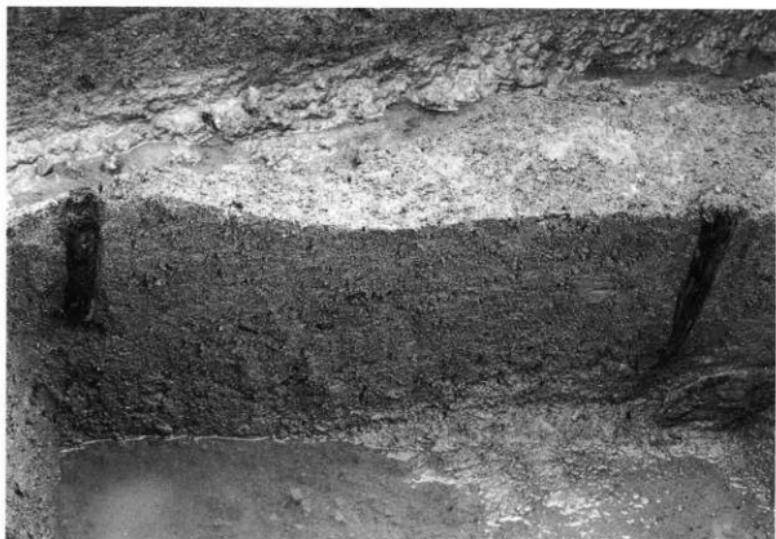
(2) 流路内骨出土状況



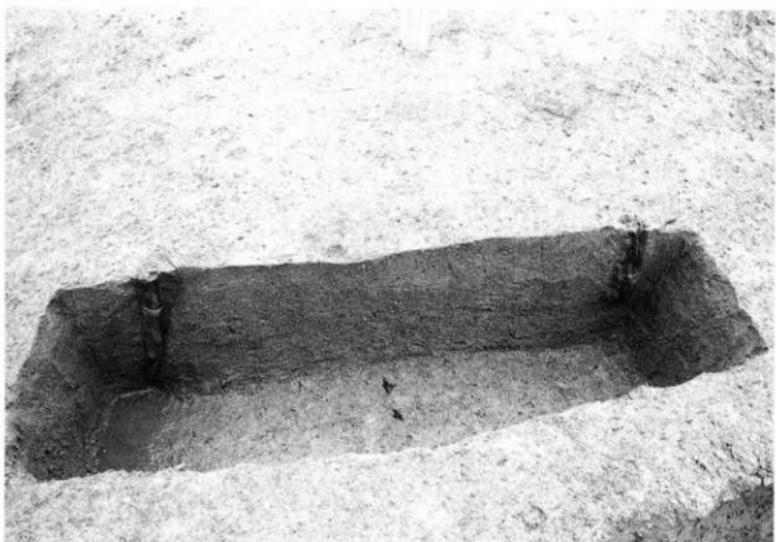
(1) 流路内遺物出土状況 1



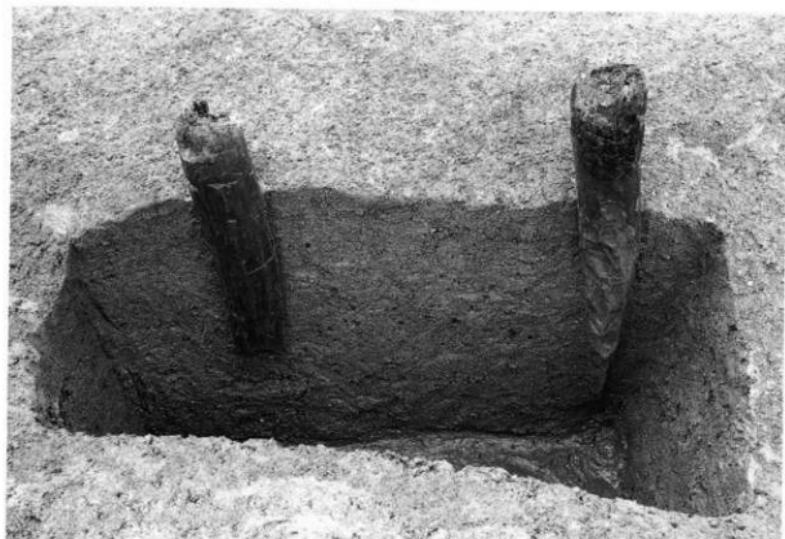
(2) 流路内遺物出土状況 2



(1) 杭1検出状況（西から）



(2) 杭2検出状況（北から）



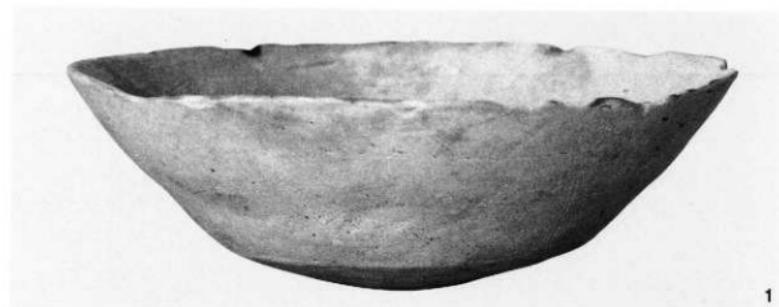
(1) 杭3検出状況（東から）



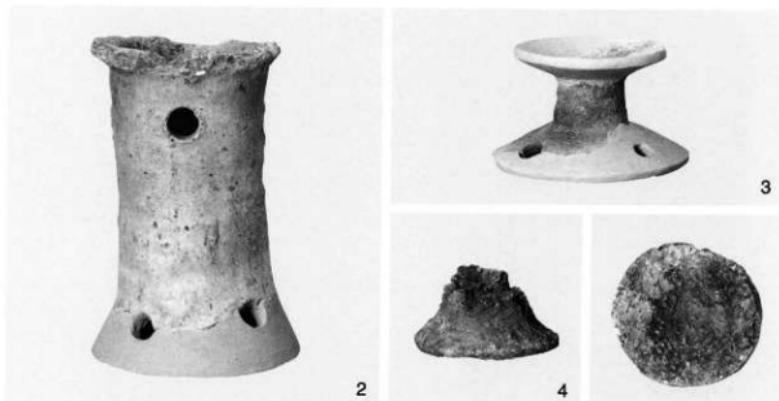
(2) 杭検出状況1



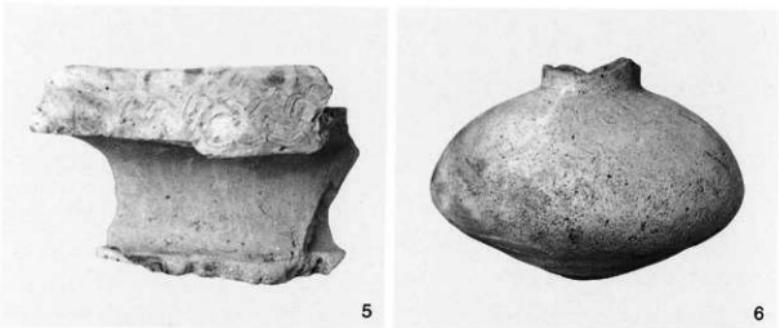
(3) 杭検出状況2



(1) 土坑 1 出土遺物



(2) 井戸 1 出土遺物



(3) 井戸 2 出土遺物



7



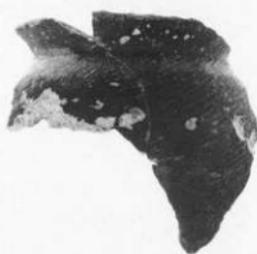
8



9



10



11



13

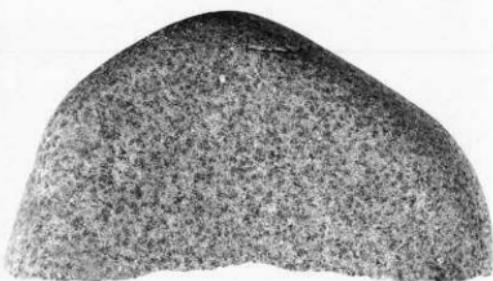


12

井戸 2 出土遺物



14



15

(1) 井戸2出土遺物



16



17



18



19



20



21

(2) 流路内出土遺物



22



23



24



25



26



27



28



29



30

流路内出土遺物



31



32



33



34



35



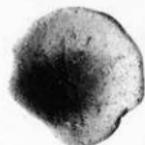
36



37



38



37



38



42

流路内・溝1出土遺物（※42のみ溝1出土）



39



40



41



41

流路内

出土遺物

豊中市文化財調査報告第39集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

－阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査－

平成8(1996)年度

平成9(1997)年3月

発行 豊中市教育委員会

編集 社会教育課文化財保護係

印刷 大和写真工業株式会社